
常春のファンタジア

グレイ・ワンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

常春のファンタジア

【Nコード】

N6960M

【作者名】

グレイ・ワンド

【あらすじ】

穏やかに時が流れる異世界“クインメリア”にあるローランドという王国に“黒天の美姫”と呼ばれる一人の名門貴族の娘が居た。容姿端麗・博学博識・時に剛毅果断と非の打ち所の無いその彼女に自国の貴族のみならず他国の王族までもが愛を謳うのだが彼女は誰一人としてその愛を受け入れようとはしなかった・・・。

何故ならば黒天の美姫こと“リュウネ・フォルネウス”には人には決して言えない秘密があったからだった。

・
・
・その秘密とは
・
・
・。

第0話『プロローグ』（前書き）

初めまして、この物語の作者のグレイ・ワンドと申します。

この作品は一応自分の処女作と言うことで投稿しています。

・・・だからという訳ではありませんがかなり拙い作品となってしまうかもしれませんがそこはどうか生暖かい目で見てやってくださいますようお願いします。

第0話『プロローグ』

く???く

俺がいやに重たい瞼を開けるとそこは見知らぬ天井だった。

「……はっ……?」

突然の事にちよつとしたパニックに陥りつつも冷静に自分の状況を説明するのならば“俺”は何故か無駄に広い部屋にあるベッドの上に寝かされていた。

（此处、何処だ? 何で“俺”こんな場所に寝かされてるんだ?）

意味も理由も分からずぼんやりと覚醒しきつていない脳を働かせようと、とりあえず俺は今、自分の置かれている状況を確認しようと首を動かして周囲を見渡そうとした。

……だがその瞬間、ズキリツと体中が原因不明の痛みに襲われ俺はついベッドの上で体を丸めてしまった。

「痛っ……っつて、何だコレ!？」

ついさっきまで全く気付きもしなかったが何故か俺の体の至る所に包帯が巻かれ、先程無理に動かしてしまったお腹の部分からは若干ながら傷が開いてしまったのか血が滲み出ていた。

（俺、のしかなくても怪我してるのか？）

そこで俺の脳味噌がようやく活動を始めたらしく、不意に疑問が俺の脳裏を過った。

「そもそも……何で俺は怪我してるんだ？」

（えっと……確か、学校帰りにコンビニによってカップ麺を買って家に帰ろうとした所までは覚えてるんだが……駄目だ、どういう訳かそこから先の記憶を何故か全然覚えてない……）

おかしい。幾ら俺の記憶を辿ってみてもこの場所に連れてこられる直前までの記憶が何故か曖昧になっていてどうしても思い出す事が出来なかった。

もしか俺は誰かに暴行を受けた拳句、誘拐されて拉致監禁されている？……何て事も一瞬だけ考えたが怪我を負わせてから誘拐し、そこから監禁した後、親切に怪我の治療をしてくれる犯罪者が何処に居るだろう？

しかも辺りを見渡しても拘束具や見張りといったモノもなく、監視カメラが設置されている……なんて物も無さそうだった……。

そういう物の代わりにこの部屋にある物といえば、天井には豪華なシャンデリア、床には高そうな絨毯、極めつけは装飾品がふんだんに使われているこれまた豪華絢爛な家具の数々……。

少なくとも此処は病院でもなければ犯罪者の秘密のアジトという線は完璧に消えた。

（……見るからに豪華なお屋敷って感じではあるんだがなあ……）

結局、状況材料が足りないこの状態に俺は完全にお手上げだった。

……コンコン。

だがその時、不意にドアの奥からノックをする音が聞こえてきた。

誰か人が居る！？……そう思った俺は息を飲んで相手がやってくるのを待った。

「失礼致します。」

ガチャリとドアノブを開けて入ってきた人物を見た瞬間、思わず俺は目が点になってしまった。

何故なら、そこに現れた人物は……。

『メイドさん』だったのだ。

一瞬、（駄目だコイツ（俺）。早く何とかしなきゃ）……とか本気で考えてしまったがジクジクと傷によって痛む体はこの状況が現実であることを物語っていた。

メイド？何故メイド？犯人はメイド？

脳内が完全にパニックに陥っている俺と突然やってきた謎のメイドさんの視線が不意に重なった。

「……！！？」

俺の顔を見たその瞬間、何故かメイドさんは信じられないモノを見たような目で俺を見つめるといきなり瞼に大粒の涙を浮かべ始めた。

「えっ！？……あのう……」

誰だって見知らぬ女性が自分の顔を見ていきなり涙を流されたらそりゃ動揺の一つもするだろう。

「お目覚めに……なられたのですね！？」

謎のメイドさんの突然の涙に動揺する俺を他所に当のメイドさんとは言うと歓喜の声をあげ、心から俺の事を心配してくれていた様に涙を流しながらも作り笑顔ではない本物の笑顔を見せてくれた。

「……はっ！少々、お待ちになって下さい。すぐさま旦那様と奥様を呼んで参りますから……！」

「あ、はい。」

ハッ和我に帰ったメイドさんのその一言に俺はつい肯定の言葉を言ってしまった次の瞬間、メイドさんはこの部屋を出てパタパタと足跡と出しながら何処かへと向かってしまった。

そして、この部屋に再び一人孤独に残された俺は数秒の沈黙の後……。

「しまった！？動揺して状況説明を聞くの忘れてた！」

メイドさんから話を聞きそびれた自分の不甲斐なさに素で後悔した……。

〈数分後〉

メイドさんが部屋を出てから数分後、ドアの向こうからバタバタと複数の足音が聞こえてきた。

さっきのメイドさんの話を聞く限りではどうやらこの建物の持ち主を呼んでくるとの事らしいが……。

（いよいよ犯人とのご対面か）

そんな風な事を考えていた次の瞬間、俺の居る部屋の扉がバタンと大きな音を立てて開くとそこから無精髭を生やしたイケメンなおっさんと金髪のすんごい美人が肩で息をしながら入ってきた。

「……あ、あなた……」

「信じられん……奇跡だ、神が奇跡を起こされたのだ……！」

何か良く判らないが夫婦らしきこの二人はいきなり俺の顔を見るや否や喜びながら互いに抱き合っていた。

しかもその二人の後ろには複数のメイドさん達も何やら優しい顔をしながら俺達を見ていた。

（……んっ？外人さん？でも日本語？アレ？そう言えばあのメイドさんも外人……アレ？？？）

かたや俺は大人数の外国人の訪問に小規模ながらパニックに陥っていた。

（そうか！この人達はきっと日本の滞在歴が長い海外の貿易商なんだ！……豪華な部屋に、流暢に日本語を話す裕福そうな外国人にメイドさん……全て辻褄が合うじゃないか！！！）

……訂正、この時の俺は完全にパニックになっている自覚がありました。

（と、とりあえず日本語が通じるんなら日本語で会話してみよう）

結局、そういう結論に至った俺は勇気を振り絞ってあの夫婦らしき二人組に視線を向けて口を開いた。

「あのう、すみません。状況を説明して下さるとありがたいんですが……」

言葉は丁寧に且つ穏便に。

顔は嫌味の無いレベルでにこやかな笑顔を意識しながら浮かべる。

初対面の人間と対人関係を形成するために必要な行動を行う俺を見て二人の外人さんはようやく俺に視線を移してくれた。

「覚えていないのですか？あなたは数日前に一人で馬車に乗り、遠出に出かけた最中に馬車ごと落雷に合い、ずっと意識不明だったのですよ？」

そう言つと金髪美人は再び涙を流し始めてしまった。

「……はっ？？？」

遠出していた？俺が？馬車で？落雷にあつた？？？

「いやいやいやいや……おかしいでしょそれはw」

金髪美人さんの話の内容に俺は苦笑いを浮かべながら右手を左右に揺らし外人特有？のユーモラスなジョークを跳ね除けようとした。

「本当の事だ。私達がお前の元に駆けつけた時には瀕死の重傷で目を覚ます確率はゼロに近いと医者に言われていたのだぞ。」

しかし、再び泣き始めた金髪美人の代わりに言葉を発したイケメンのおっさんの声はとても真剣味を帯びていた。

「……もしかしたら、まだ落雷のショックで精神が安定していないのかもしれん。……目が覚めたのなら体の方もキチンと診てもらった方が良さだろうしな。誰か！医者を呼べ！！！」

おっさんのその一言で周囲に居たメイドさん達はバタバタと動き

始め、気が付けば俺もベッドに寝かされ医者が来るまで安静にしている様にクギを指された。

まあ、精神の安定云々はともかくとして確かに俺の体から未だにジクジクと体中に鈍痛が走っているのは事実だった。

そういう意味では医者存在はありがたいし第3者なら状況の説明もしやすいだろう。そう思った俺はあえて何も言わずに医者が来るのを待つことにした。

～あれから30分後～

あれから数分後、俺はメイドさんが連れてきた老練な顔をした医者
の診察を受けた。

『なんじゃこりゃ

あ！！！！！』

そこで思わぬ発見がありました

医者 of 診察の最中、俺は部屋の近くに立てかけてあった鏡をさりげなく覗き込むと……そこに映し出されていたのは16年間使い続けてきた自分の顔ではなく、何故か見知らぬ可憐な幼女の顔と姿が映し出されていたのだ。

背中の中間位まで届いている長い黒髪に薄いオレンジ色の瞳……加えてフランス人形の様に整った顔立ちをした可憐な幼女が鏡の向こうで顔から嫌な汗を流しながら口をパクパクさせていた。

【誰だこれは】

目の前に置かれた鏡を見ながらプルプルと震える“俺”。

……そう、認めたくはないが上記に書かれている様に何故か俺の姿は年端も無い幼い幼女へと変貌を遂げていた。

(……俺の名前は月城悠馬^{つきしろ ゆうま}。自宅から程近い高校に通う普通の高

校生……趣味は読書とゲームと映画鑑賞……。)

普通の高校生が幼女に……さすがにそんな非現実遭遇してしまつたら誰だつて自分の正気を疑つてしまふのは無理からぬことだと思つたろう。

こうして、俺の物語は自分の正気を確認する所からスタートという何とも前例の無い始まりとなつた……。

そして未だに俺は此処が何処なのか、どういつ状況に陥っているのかすら分らない……。。

第0話『プロローグ』（後書き）

話の在り方が少しおかしかったので修正しました。
これからは計画的に執筆していきますので宜しく願います。

第1話『此処は何処？私はだあれ？』（前書き）

更新が遅れてしまつてまことに申し訳ありません。><

第1話『此処は何処？私はだあれ？』

「もしかするとお嬢さんは落雷の影響で記憶に関して損傷がある可能性がありますな……」

鏡に移った自分が文字通り“変わり果てた姿”になっていたのを確認しつつパニック状態に陥っていた俺の様子を見た医者がポツリとそう呟いた。

「先生！それは一体どういうことですか!？」

その言葉を聞いて、金髪美人さんはえらく驚いた様子で医者を見ていた。

ちなみにこの時の俺はちょっとした脳内フリーズを引き起こしていた為に医者の記憶喪失疑惑にツツコミを入れることが出来なかった。

「……では、少しテストをしてみましょう。」

医者はおもむろにそう言う俺の前に座り込み俺の顔を見ながら質問を始めた。

「お嬢さん、貴方の名前は何ですか？」

お嬢さん……俺はえらくその言葉に不快感を覚えたがとりあえず自分の置かれている状況を確認する意味でも医者の質問に対して俺は記憶を失った少女として対応する事を選んだ。

「……分かりません。……それよりもここは何処ですか？どうして私はこんな所に……」

弱弱しく、且つ若干可愛げに……そう意識して発音して見ると案の定、まるで小鳥の囀りの様なソプラノボイスが俺の口から出てきた。

一方、俺の回答を聞いた周囲の空気は少しずつざわめき始めていた。

「意識を失う前までに貴女が覚えている最後の記憶は何ですか？」

「いいえ。何も、何も思い出せないんです」

見たか、俺のこの巧みな話術。見ず知らずながらも心配してくれている人達に嘘を付いているという罪悪感と自己嫌悪で内心、心が折れそうだが敢えて心を鬼に変えてか弱い幼女を俺は演出した。

「間違いありません。お嬢さんは事故の要因で記憶の喪失が見受けられます」

重々しく、苦悩に満ちた顔つきで初老の医者がそう周囲に伝えた瞬間、金髪美人さんはいきなり俺が腰かけているベッドの前まで向かってきた。

「本当に何も分からないの？……私よ“ソフィア・フォルネウス”……貴女のお母さんよ……。」

自ら母と名乗る金髪美人さん改めソフィアさんはそう言いながら

必死な顔つきで俺に向かって話し掛けてきた。

そのあまりの必死さに思わず嘘をついてしまった自分に更に重い罪悪感がのし掛かってきたが俺は後悔の念を感じながらも哀しげに首を左右に振って見せた。

「……………ああ、神よ……………」

すると、ソフィアさんはガクリとその場で膝を付いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6960m/>

常春のファンタジア

2010年11月20日10時55分発行